2014 年 9 月 12 日(金)～14 日(日)
第 15 回日本早期認知症学会大会(千葉)

開設 6 年経過した通所リハビリテーションの認知症予防の実際(第 6 報) －前頭葉活性化を中心に－

植田浩次 1) 大谷章仁 1) 松本祥平 1) 井畑宏敏 1) 西幸宏 1) 宮島千鳥 1) 石垣惠一 1) 藤田園子 1) 村田智恵 2)
1)医療法人聖志会 渡辺病院、2)ケアプランセンターわたなべ

[はじめに] 当院の通所リハビリテーションにおいて、平成 20 年 7 月から利用者に対して前頭葉賦活化認知リハビリテーションを開始した。今回、開始後 6 年経過しており、利用者と非利用者の認知機能の変化を集積・分析し報告したい。

[対象] 通所リハビリテーションには 60 名の軽度の認知障害・認知症の方が週 1 回ないし 2 回参加している。そのうち 46～61 ヵ月(平均 52.3 ヵ月間)以上継続している利用者 6 名(男性 3 名:女性 3 名)平均年齢 84.3(76～89 歳)HDS-R 平均 18.1±6.7 を利用群として、非利用者を対象群 39～53 ヶ月(平均 46.7 ヵ月間)以上外来継続している 6 名(女性 6 名)平均年齢 81.0 歳(72～88 歳)HDS-R 平均 14.6±3.8 とした。

[方法] 1 回あたり 3 時間 30 分の作業療法士による前頭葉賦活化認知リハビリテーション(休憩時間を含む)を行った。内容:①指体操 ②ひらがな並び替え ③条件しりとりなど利用者と非利用者の HDS-R の点数変化を算出し、二標本 t 検定(ウェルチ検定)を行った。

[倫理的配慮] 利用者には研究の主旨と個人が特定されないよう配慮を行う旨を口頭にて伝え承諾を得た。

[結果] 現在(平成 25 年 12 月 10 日)の低下点数は、利用者群において 2.7±5.9、非利用者群において 3.8±6.2 であり、両者の間には有意な差が見られなかった。(p＝0.74)

[考察] 一昨年の報告では、利用者と非利用者の間に有意差を認めたが、その2年後の今回は両者の間に統計学的に有意な差が見られず、平均点において 1 点の差のみにとどまった。前頭葉活性化訓練が有効ではないとは言い切れないが、他の要因も検討して、事例を積み重ねる必要があると思われた。